G-9　多賀城市八幡地区　　2012 年 1 月 17 日（火）

報告者名　菊地　暁　　被調査者生年　① 1947 年（女）
調査者名　菊地　暁　　被調査者属性　① 主婦、八幡出身・在住
補助調査者　赤尾　智宏

被調査者（主な聞き書きは話者 ① から）

＊話者 ②（1924 生まれ、多賀城市高橋出身、1946 年嫁入り、D 氏の妻）
＊話者 ③（1947 年生まれ、八幡出身、在住、D 氏の娘）
＊話者 ④（1949 年生まれ、松島町北小泉出身、1970 年婿入り、話者 ① の夫）

話者家について

話者家がいつから八幡にいるのかは、よく分からない。ウチは分家。何代前に分かれたかはよく分からないが、相当古いとのこと。檀那寺の不磷寺（臨済宗）のお墓には、分かる範囲の先祖の名前（A 氏、B 氏、C 氏、D 氏）を刻んでいる。D 氏は平成 4 年、68 歳で他界。前の日までは元気で、突然亡くなった。農業委員、農協理事、市会議員などを務め、いつも外に出歩いていた。

話者家の本家の屋号はカエモン。去年、おじいさんが亡くなって、50 代の若い人が継いでいる。E 氏の家も本家から分かれた家。昔は男女を問わず第一子が家督を継いだため、男の子を分家に出すことが多かったらしい。E 氏の家は分家の筆頭格。本家の葬儀があるとき、葬列で松明を持つ役を務める。本家は橘会館の近くでガソリンスタンドをやっていたが、今回の津波で止めてしまった。以前はそこでよく立ち話した。昔は本家のおじいちゃんもよくお茶を飲みに来た。話者家でツキアイのあるのはその 2 軒くらい。それも葬式関係ぐらいになった。

話者 ② は大正 13 年生まれ。昭和 21 年 12 月 4 日、21 歳の時に多賀城の高橋の農家から馬車に乗せてもらって嫁いで来た。米一俵で買ったタンスが嫁入り道具だったが、津波で傷んでしまったので捨てた。話者 ② は実家も農家だったので、生活はそれほど変わらなかったが、こちらはお舅さんが 3 人（B 氏、C 氏、C 氏の妻）もいたので苦労した。寒い季節には 3 人分の湯たんぽを用意しなければならず、寒いからもっと暖めろと言われて大変だった、今の人たちは年寄り 1 人しかいなくても大変だといっているが。まつのさんには娘が二人いる。男の子も産んだが早世した。

話者 ③（話者 ② 娘）は昭和 22 年生まれ。下に妹がいる。父はいろいろと出歩き、母は畑仕事に出ることが多かったので、小さい頃から家事を全部やらされた。祖母は幼い頃に亡くなっていたので、祖父にあれこれと教わって育った。多賀城小学校、多賀城中学校を出て仙台の高校に進学したが、母が畑仕事を手伝わせたかったので、「高校で終わり」といわれた。

昭和 45 年、松島・北小泉出身の話者 ④ と結婚。もともと勤め人で、その後独立して、電気関係の図面を書く仕事をしていたのが、脳梗塞で倒れたので仕事を辞めた。息子は働きに出てい

る。

家屋と家財

話者 ③ が小さい頃は茅葺きの家だった。途中で屋根だけ瓦に直した。皇太子の結婚式にあわせて買っていたテレビを向いのＦ氏に一時預かってもらい、屋根にシートを被せて、「空見えるね」なんていいながら寝た。今の家に建て替えたのは昭和 48 年のこと。

立て替え前の家は、道路に面して納戸があった。板蔵や土蔵は現在と同じ位置（敷地の奥）。板倉は明治頃のもので、農具小屋というかガラクタ小屋。母屋はチャノマは 8 畳、ザシキは 12 畳か 14 畳、裏口が土間でそこにクドがあった。今の（電気関係製図の）事務所のあたりで別棟の牛小屋。牛小屋の手前に野菜などの収穫物を置いておく小屋があり、コイと呼んでいた。ほかに、離れの風呂と便所があった。

電気製品はヨソよりも早く買った。父が家事をする娘のことを配慮したらしい。洗濯機は電気屋の店頭に並ぶより早くに買っていた。

ガスも早かった。それ以前は麦殻、マメ殻でゴハンを炊いた。パリパリといい音を立てて焼けた。話者 ① は小学校 4 年生の頃から、クドでゴハンを炊いた。ほとんどすることがなくてもその場についていなければならなかった。

お風呂は家の外にあり、杉葉を焚いた。ヤマキリといって、正月が終わって田んぼが始まる前の頃、仙石線の電車で利府の浜田（無人駅）まで行って、山で杉葉を刈り、地区で馬車を用意して運んだ。山を所有者から一山いくらで買い、それを八幡の農家で区画割りしてくじ引きして、杉の葉を買った。弁当持参で行ったが、男連中は一仕事の後に飲み会をする。その時、女は家に返される。「男はずるいっちゃねぇ」（話者 ② 談）。

茅にも組合のようなものがあり、入っている人が順番で使えるようになっていた。今の仙台新港、貞山堀のほうに茅地（カンノヤチ）があった。当時は自衛隊基地しかなかった。刈り取りは協同作業。馬やトラックで運んだ。その時も男は飲んでいた。

震災前は隣の家との隙間がなく、昼間でも暗かった。（話者 ② は）実家が電車もバスも見える見晴らしの良いところだったので、なんでこんな所に嫁いで来たのかと思っていた。周囲の人にも（日当たりの良い）畑のほうに家を建てれば良いのに、と言われていたが、（D 氏が）暗い部屋で電気つけてでも、ここが良いといっていた。ここは郵便局、市役所、駅、なんでも近くて便利だ。震災の隣の家が立て替えになり、（嫁入りから）60 年たって初めて居間にお天道様が照るようになった。

生業

話者家はもともと農家。話者②が嫁いだ時には 1 町の田んぼがあった。今でも自家用分ぐらい（4 反）はある。田んぼは八幡神社の近く（宮内）と八幡小学校の近くにある。小学校を建てる際に田んぼをいくらか売った。今年は（津波で）作付けできなかった。

話者家では農耕用のウシを飼っていた。話者 ① が中学 3 年になるぐらいまで。牛は扱いがめんどうだったので、三輪車を使うこともあった。そのうち、畑を売って耕耘機、テーラーを買った。バイクも畑を売って買った。（D 氏が）新しいもの好きだった。

D 氏は自分で畑仕事をしないのだが、「今日はここまで」と段取りだけは決めていった。働くのは話者 ② と話者 ①。ほかの家よりも多目に作っていたので大変だった。草取りは首が疲れるので嫌いだった（話者 ①）。イッチョウリンという、カラカラと回して草を取る押し車の除草機があったが、草が詰まってよく故障した。そうすると、D 氏は話者②の所に持ってきた。「（修理を）自分でやらない」（話者 ② 談）。

その後、宮内の畑の土地は借地にした。アパートもあったが、今回の津波で被災、全部解体して廃業した。

契約講

契約講は以前はやっていた。話者家の本家と分家ほか 13、4 軒ぐらい。葬式の手伝いなどをした。お金を積み立てて融資もした。昔は当番で宿を回して会食した。そのうち仕出屋に頼むようになり、今はやめた。

（天童家家臣団の契約講をさすらしい）ダンポケイヤクという言葉もあった。草刈さんなどが入っていた。ダンポはあまりいい言葉ではない。「あいつ、ダンポ」などと、乗せられやすい、成り上がってえらぶるような人をさしたような気がする。

講行事

コバハラ講（古峯ケ原講）では年に 1 回、講員全員で古峯神社にお参りに行く。普通は 10 人ぐらい。多くて 20 人ほど。もともとマチドオリ（表通り沿に家がある人）の講だったが、数年前、ヨコドオリのコバハラ講を止めてしまったので、横町の人も一緒になった。話者 ④ が会計担当なので、1 泊 2 日のお参りに同行する。以前は話者②が行っていた。ご祈祷してもらって、お札をみんなに配った。昔は鉄道会社で募集があり、1 月頃に鉄道員さんが来た。今は個人でバスをたのんでいる。昨年は震災で中止した。

このあたりでは地蔵講はない。沖地区にはある。

不磷寺の婦人会（昔は婦人部）では、年に 10 回ほど、お経、ご詠歌をして、お茶を飲む集まりがある。班で当番に当たっている。

浄水場の祠

話者家の本家では、浄水場にある地蔵か八幡かの祠を祀っていた。鳥居か何かがあったような気がするが、（話者 ① が）子供の頃に見たきりなのでよく覚えていない。下馬にあった神様を、そこではいらないといわれたため、本家で祀るようになったのだという。流れてきたものだともいう。7 月か 8 月のスイカのある頃にお祭りがあり、お祭りするからお茶のみにきて、といわれた。本家は月参りもしていたようだが、祠の場所が浄水場になり、水道局でカギをかけてしまったので、今はお参りしていない。

このほか、本家の先代がキジラシマ観音を祀っていた。

神棚

神棚（幅が 3 メートルほどある）はこの家を建て替える時、D 氏が絶対にそのまま使うと言

い張って、古い家から取り外し、立て替え後に入れ直したもの。男の人が 8 人がかりで作業した。赤色なのは、宮大工さんに塗ってもらったらしい。本家にはこれよりもっと大きな神棚があった、立て替えで部屋が狭くなって納められず、処分した。

神棚の中のお札は八幡神社の神主さんが配ったもの。神棚にあげられた青いダルマは、久兵衛が選挙用に仙台で買ったもの。

神棚から下がる正月用の刷り物（海老が描かれている、仏壇用に昆布を描いたものもある）は生協で買った。重しの重ね餅は家でついたもの。神棚の掃除は男の仕事。今は息子がやる。正月飾りは 12 月 31 日、お風呂に入って身体を清めてからやった。今年の大晦日、知人の男性が、神棚を整える前にお風呂に入っていると、火事でサイレンがなり、消防団員だったのでそのまま神棚後回しで出かけて行ったという。

正月行事

正月のお餅は年末に自宅で用意する。津波で餅つき機が潰れたので、今年新調した。29 日はクニチモチ（苦日餅？）なので避ける。その前の大安、先勝などの日に搗く。去年は 27 日に搗いて、28 日に餅切りした。27 日のお昼には、搗きたてのお餅で納豆餅、ショウガ餅などいろいろ作って食べる。ウチでは 2 つ重ねの餅を神棚などに上げるが、多賀城鶴ヶ谷の妹の嫁ぎ先は、お姑さんが岩手県の出身で、3 つ重ねの餅をあげる。この辺りでは 3 つ重ねは売っていないので、ウチで作ったものを分ける。

正月飾り玄関飾りのほか、輪通しを 20 本ほど用意して、風呂、トイレ、自転車などにかける。板倉にはお餅を供えた。

元旦にはお雑煮を作る。神棚、床の間、御稲荷さん（屋敷地に祠がある）にも供える。お膳を用意するのは女性だが、あげおろしは男性が行う。餅はあげた人が食べる。今年は息子が供えた。ウチではお雑煮とは別に、お雑煮餅を茶碗に分けて納豆をかけて食べていた。話者③が子供の頃から。松島出身の話者④はイクラを載せて食べるが、誰もまねをしない。

11 日はノハダテといい、農作業を始める日。それにあわせてあんこ餅を食べた。昔は 11 日まではあんこ餅を食べなかった。今年は 2 日にはもう食べた。

14 日は女の年取り。ウチではお精進を食べる。昔は男が作ったらしいが、今は女が用意する。ウチは 14 日までは鶏肉以外の肉を食べない。ヨソは 7 日までらしい。外食する分には良いということになっているのだが、息子も外ういうことはしない。新年会なども鴨肉などが多い。他の肉が出ると残す人が多いらしい。

正月は仏事もお休み。お茶もあげない。女の年取りがすんで 15 日の朝からあげる。翌日 16 日はお墓参り。精進料理を用意して仏壇にあげる。

盆行事

8 月 13 日にはオテラに精霊迎えに行く。その前に、玄関に提灯を下げ、仏壇の前に祭壇を用意する。この祭壇は津波で流された。祭壇の上に畑でとれたスイカ、キュウリやナスで作った馬を並べる。八幡神社のほうは畑が広がり、キュウリやナスがたくさんあった。昔は笹竹に糸でほおずきやナスをつるした。笹は留ヶ谷や近所の竹藪に（子供たち）みんなで遊びに行って採って

きた。最近は笹をとるところもないので皿に乗せるだけ。

迎え火には、畑に麦を作っていたので、その麦殻を一斗缶で燃やした。今は割り箸や葬儀屋で売っているものを焚く。昔は 13 日から 16 日まで、下一（丁目の今野家）と上一（丁目の江口家）で順番に（一日毎に）送り火を焚いた。道路が狭かったから、防火上の理由だろうか。今はあまり焚かない。この辺りでは焚くのは G 氏とウチぐらい。

16 日は精霊送り。普通はそこで祭壇を片付けるが、24 日の地蔵盆までとっておくこともある。昔はナスやキュウリなどはコモクサを編んだものに包んで 16 日の朝に砂押川に流した（話者 ① の子供の頃まで）。今はゴミに出す。ちょうちんを地蔵盆の日にお寺に納める。

震災

津波でいろいろなものが流れて来たし、いろいろなものが流れていった。最初、水音が聞こえてきて、洗濯はしていないし、流しも使っていないし、何かと思ったら津波だった。いろいろなものが流れて来た。車が 3 回転ぐらいして敷地に入ってきた。財布も流れて来て、後で届けると持ち主が見つかった。一昨年の花火大会か何かで落としたものだったらしい。

ウラのほうが低いので土蔵、板蔵は全部だめになった。板蔵は最初の地震で（中の）冷蔵庫が倒れ、それから水圧で蔵の底が抜けて水が入ってしまった。中に収めていた米もつかってしまったので全部捨てた。車庫のシャッターもゆがんで水が入った。息子が、ウチは非常用発電機があるから、何かあっても大丈夫といっていたが、それも水につかって動かなかった。

水は床上 50、60 センチほどまで来た。無事だった家具類は 2 階に上げた。タンスというタンスは全部捨てた。捨てる前にバールでこじ開けて中身を出した。D 氏の母の（嫁入り道具の）仙台タンスだけ残っている。多少水につかったが引き出しも開く。仏壇の下の引き出しは、津波があってからは使わないようにしている。

流れてきた海水は、ヘドロ、油、ゴミなどが浮かび、洗い落とすのに大変だった。長靴もすぐ泥だらけになり、洗う水もなかったが、（近所の人に）流れて来たポカリスエットで洗えば良いといわれ、ポカリスエットやらコーラやらで洗った。

10 年前、宮内の畑にアパートを 3 棟建てて貸していた。1 つは残ったが、1 つは道路を越えて隣の畑に流され、1 つは北側が玄関だったのが 1 回転して南側が玄関になっていた。ヨソの家にぶつからなくて良かった。住人はみなジャスコに逃げて助かった。全部解体して今は更地になっている。大工さんが使えそうな廃材を持って行った。